琉球大学学術リポジトリ

ハワイへの憧憬・アメリカへの違和：宮城聰とハワイ

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所
	公開日: 2016-05-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33905

国際沖縄研究　創刊号
2010 年 3 月　95–109 頁

IJOS: International Journal of Okinawan Studies
Premier Issue　March 2010, pp. 95–109

ハワイへの憧憬・アメリカへの違和
――宮城聰とハワイ――

仲　程　昌　徳*

A Longing for Hawai‘i, Discomfort towards America: Satoshi Miyagi, Hawai‘i, and Okinawan Literature

NAKAHODO Masanori

There was an Okinawan writer named Satoshi Miyagi, who was active from the 1930s until the beginning of the 1940s. Leaving Okinawa for Tokyo in 1921 and getting involved with the journal *Kaizo* as an editor, Miyagi went to Hawai‘i to promote a collection of Japanese literature that his company, Kaizo-sha, published. While in Hawai‘i, his longtime yearning to be a professional writer became stronger, and Miyagi published his first short stories, “The Earth — Our Home” and “The Birth of a Living.” Miyagi was instantly recognized as one of the most promising young writers, and he again went to Hawai‘i in 1935. He published a collection of short stories titled *Honolulu Stories* in July 1936, which was based on his visits to Hawai‘i. He revised *Honolulu Stories*, and it turned into *Hawai‘i* in April 1946. The present discussion focuses on Miyagi and his 1946 work *Hawai‘i* in the context of Okinawan literature, suggesting Miyagi’s cross-cultural experience in Hawai‘i was the driving force for him to create his story.

はじめに

宮城聰は、昭和の初期、2 度ハワイに渡っている。

第 1 回目は、1927 年（昭和 2 年）5 月、横浜から「サイベリヤ丸」で出帆している。宮城によれば、「五月一日の夜、改造社の日本文学全集のための講演へ出かける芥川龍之介を上野駅で見送った」「その翌々日の三日」のことで、「サイベリヤ丸」がホノルルに着いたのは出発してから「十一日目」のことであったという[1)]。

宮城の目的は、ハワイ在住「日本人へ日本文学全集を宣伝するため」であった。改造社の営業部では「ノボリ、横幕、ポスター類」を沢山船に積み込んでいた。宮城が渡布したその頃「ハワイや米本国へ旅行する人は、今日とは異り、極めて少数であったので、

* 元琉球大学教授 Professor (retired in 2009), University of the Ryukyus

移民としては随分多くの日本人が行っているのに、ハワイがどんなところであるか、よくわかって」いなかった。宮城は「知人の一人もいない未知の土地なので、不安もあった」[2] が、船のなかで、郷里広島を訪問しての帰りである「山城ホテルの若主人」[3] と知り合い、ホノルルの同ホテルに宿泊する。そして、ホテルの近くでハワイ産業会社を経営していた平良牛助を知り、彼の紹介でドクター小波津の知遇を得、新城銀次郎と出会う。

新城は、宮城を連れて、ホノルル中の書店を廻り、宣伝の手配をしてくれた。さらにホノルル在住者に協力を依頼し「書店の歩道に面する表に、改造営業部が積み込んであった横幕を張って、自動車の車体を赤地の布に日本文学全集と改造社の社名を白抜きにした横幕で張り廻らした十数台の自動車を連ねて」街頭を走るとともに、「改造社のタスキを肩から掛けて、ホノルルの街を練り廻って宣伝」してくれた。

6 月 4 日、ホノルルで発行されていた邦字新聞の 1 つ『布哇報知』は「雑誌『改造』の記者、宮城久輝氏は今朝入港のサイベリア丸にて来布したが、改造社発行の現代日本文学全集の件の要件にて滞在する由で、山城ホテル宿泊中」の記事を出していて、それも大きな宣伝になったはずである。

宮城の最初の渡航は、宮城自身の回想や、『布哇報知』の記事からわかるように改造社社員として改造社発行の日本文学全集を売り込むためであったが、ハワイに来た宮城に大きな転機が訪れる。そのことについて、彼は次のように書いていた。

> 日本文学全集の宣伝に刺激されてか、東京に帰って、自分も勤めるかたわら作品にとりかゝり度いという欲望が、心底深く燃えていた。米本国へ行こうと思えば、ロスアンゼルスかサンフランシスコでは、移民局の調べも必要なかったのであったが、米国への旅行は、文壇にさえ出れば、いつでも行けるから、早く帰って、文学をしたい、という心が強く、米本国旅行の意欲は全くなかった[4]。

宮城は、ハワイで、俄然「文学をしたい」という思いにとらわれ「行こうと思えば改造社は、全集景気で、金に制限など」なく米本国まで行くことが出来たにもかかわらず、一等船賃を請求しただけで、帰ってしまう[5]。

宮城の 2 度目の渡航は、1935 年 5 月[6]。秩父丸の三等船客としてハワイに向かったのは、「改造社の費用節約」ということもさることながら、「前田河広一郎にならって」[7] のことで、いわゆる「作品の取材」[8] のためであった。

1935 年 6 月 25 日付け『日布時事』は「宮城久輝氏が新進作家になつて再来布す　創作資料蒐集のため」の見出しで「数年前改造社の日本文学全集宣伝のため来布せる宮城聰氏（久輝）は既報の如く二十日秩父丸で再来布した、氏は当地から帰朝後改造社を退き文筆に志ざし全ゆる艱難を嘗めつゝ精進の結果昨年三月東日大毎に中篇小説発表の機会を与へられ引きつゞき三田文学に「生活の誕生」、八月号の改造に「樫の芽生」を発表し新進作家としての地位を確保し、その前途を嘱目されてゐるが、氏は現状に満足□□□□□□□□ため来布、二三ケ月滞在のはずである、氏は目下『プレシデント・マッキンレー

号送還記』といふ題で創作執筆中であるが、その余暇に数種の雑誌にも寄稿して居り、七月号の『短歌研究』には「想ひ出のハワイ短歌」といふ題下で潮音詩社の集まり等を紹介してゐる」（□は不明箇所）との記事を出していた。

25 日の記事は「既報の如く」と記してあるように、21 日の記事を受けて書かれたものである。21 日の新聞は「新進作家宮城氏昨便で来布」として「大毎の懸賞小説に当選し文壇の新進作家に列せられてゐる雑誌改造社記者宮城久輝氏（沖縄県出身）は所報の如く昨日の秩父丸で来布したが今回の来布の目的の大半はハワイを材料にした創作の材料蒐集にあるそうでワザと三等船客の中に雑つてゐた、同氏は元改造記者で例の円本全盛時代にこの用件で特派来布したこともあり当地に知人も多い、現在又改造社に再入社し山本社長の顧問社員である」と報じていた。

宮城の渡布の目的は、1 度目と 2 度目とでは大きく変わっていた。1 度目のハワイは改造社の日本文学全集の宣伝のためであったが、2 度目のハワイは、作品の素材を収集するためであった。

改造社社員宮城久輝は、新進作家宮城聰へと変貌していた。『日布時事』の 2 度にわたる宮城の来布を報じた記事は、そのことをよく伝えている。

宮城は、『日布時事』からわかるように「東日大毎」に「中篇小説」を発表する機会を得て新進作家への第一歩を踏み出したといっていいが、その記念碑的な作品「故郷は地球」は、ハワイでの見聞をとり入れていた[9)]。

ハワイは、作家宮城聰の誕生を促した地であった。そして「故郷は地球」をはじめとして数多くの作品を輩出させていく地になっていく。

1. 理想郷の現実――「故郷は地球」

「故郷は地球」は、「日本の代表的二大新聞の一つである東京日日新聞、大阪毎日新聞が、六人の流行作家に一人ずつ新人を推薦させ、挿絵も名声の高い画壇の大家によって新人を推薦させて貰い、夕刊連載創作純文学を企画した」[10)] ことから、里見弴の推薦で連載された作品の一つで、「島国根性の強い沖縄差別への鬱憤をこめたものであった」[11)] と宮城は回顧している。

1934 年（昭和 9）2 月 13 日から 3 月 17 日にかけて『東京日日新聞』の夕刊に連載された作品[12)]は、東京の雑誌社で働く主人公の目前で、日々繰り広げられる沖縄差別のさまざまな様態を抉り出していたが、その終わりをハワイで閉じていた[13)]。

ハワイの場面は、とってつけたかのようで、唐突の感をいなめない。それだけに、評価の分かれるところだが、そこには、大切な出来事が 2 つ取り出されていた。その 1 つは「サントスの従兄」から届いた手紙と関係するものであり[14)]、あとの 1 つは「国際村」に関するものである。2 つは、前者がローカリズム、後者がグローバリズムを表象するものとなっているが、その後者に、何故ハワイの場面をあえて付け加えたか鮮明にしてくれる箇所があった。

次は、その部分である。

やがてヌアヌパリの崖を築いた道を下つて、海の開けた裏オアフへ出た。
「ココカヒつて如何いふ意味ですか…」
「カナカの言葉で兄弟といふことらしいですね、あの土地を持つてゐるリチャーズさんが国際村、日本でいへば別荘地を建設しようとしてゐるんですよ。君が四五年後にまた来る時には立派な村が出来てゐるだらう。僕がいい家を作つて置くからそこで一年位本を読むんだね…」
　ココカヒ村建設地は自動車を下りて一時間ばかり歩いた。すでに大勢の人が行つてゐる。スロープの草原と藪を歩いてゐる様は、三百年の昔欧州人がはじめてアメリカへ来たのを想像させた。

宮城は、ここに取上げられている場所について「裏オアフの記」でも触れている。そこでは次のようになっている。

　先の旅、私はRさんに連れられて、この島を目近かに見る岬へ行つたことがあった。そこはこの湾へ傾く藪であつたが、そこにココカヒといふ村を建てるといふことであつた。ココカヒはカナカの言葉で、血或ひは兄弟と云つた意味だと聞いたが、我等は、グワベといふジャムを作る野生の果物の繁茂する中の道や、小丘や溝なども通つてそこへ行き着いた。分譲しようといふアメリカ人は牧師とかで、この不毛の土地を売るのに一生懸命であつた。理想郷を建設するといふ宣伝が利いたのであらう。随分多勢の人が、人種の差別なく土地の見立てに集つていた。中腹にオハイの大木のある広場があつたが、そこではココカヒ村建設の儀式が始められ、星条旗を中央にして各国の旗が真直に立ち、自国の国旗を前にして、人種と装ひの異る娘等が横列に並んでゐた。同胞娘はたしか三人と憶えるが、お太鼓の振り袖姿で支那人娘や比島娘に並んでゐた。賛美歌を歌ひ、地主が何か話して、それが儀式であつた。私はその過ぎた日を懐ひ乍ら、その辺りを心にとめて見るのであつたが、ココカヒの村らしい姿は何処にもなく、昔を語り顔に草に被はれた緩かな傾斜の原ばかりだつた。

「故郷は地球」の場面は、第1回目の渡布の際、「Rさん」に案内されて見た情景を取り入れて書かれたものであったことが「裏オアフの記」の記述からわかる。そしてそれはほぼ事実に即していたこともわかるが「島国根性の強い沖縄差別への鬱憤」をこめて書かれた作品に、とってつけたかのようにその体験がつけ加えられたのは「国際村」構想に強く魅かれるものがあったことによるであろう。
「国際村」建設現場は、宮城にとってまさに「理想郷」だと受け取られたのである。そこには差別などあるはずはないと考えたことで、「差別」を取り上げた作品の結びに相応しいものとしてつけ加えられたのである。
ハワイが憧れの地として見られていた。

宮城が、同地を再訪したのは「理想郷」がどのようになっているか知りたいという思いがあったからであろう。さらには「君が四五年後にまた来る時には立派な村が出来てゐるだらう。僕がいい家を作つて置くからそこで一年位本を読むんだね…」といわれた言葉にある期待感を持っていたのではないかとも思われるが、計画は、本体そのものが破綻していた。

「故郷は地球」と「裏オアフの記」とでは、違いが見られた。それは、前者が「理想郷」実現へ向けての計画が進行中であった時期が扱われていたこと、後者が「理想郷」計画が挫折した後のことが書かれているといった違いではない。もっと微妙な違いである。

「理想郷」実現にむけての建設が進む現場について、「故郷は地球」では「あの土地を持つてゐるリチャーズさんが国際村、日本でいへば別荘地を建設しようとしてゐるんですよ」と書いていたのに対し、「裏オアフの記」では「分譲しようといふアメリカ人は牧師とかで、この不毛の土地を売るのに一生懸命であつた」と書いていた。

「国際村」建設の実際は、「裏オアフの記」に見られるとおりであったに違いない。それが「故郷は地球」では消されていた。「国際村」構想が、「不毛の土地」を売らんがための事業であったことを隠蔽したのである。

「故郷は地球」は、「理想郷」を描こうとしたのである。そこには、宮城の夢が託されていたといってもいいだろう。しかし、ハワイの現実は、「理想郷」とは遠く隔たっていた。「ジャガス」が書かれる由縁である。

2. 移民の現実――「ジャガス」

宮城が、ハワイから戻ってきて、再び渡布するまでの間に書いた、ハワイに取材した作品は「故郷は地球」だけではなかった。そのことに関して宮城は「昭和九年から同十年の四月頃までの目ぼしい物語は、週刊朝日の特別号に掲載された『人種の復讐』[15] と、(中略) それに本誌に掲載して貰った『ジャガス』」[16] であると書いていた。

宮城は「ジャガス」について「『ジャガス』は、改造社の「文芸」(文学雑誌) へ持ち込み依頼したが、編集者が採ってくれないので三田文学へ持って行った。そうしたらこれも五、六日ばかりで活字になった」と述べていた。宮城は作品に自信があったので、改造社の山本社長に送ったところ、「いい作品」だと褒められたばかりでなく、「もう一度ハワイへ行って見ないか」[17] といわれ、即座に 2 度目のハワイ旅行が決まったというおまけつきのものであった。

「ジャガス」は、『三田文学』1934 年 (昭和 9) 12 月号に発表された宮城の「唯一の戯曲」[18] で、「序景」を含め全六景からなっている。

「序景」は、「カナカ人」同士の土地の売買をめぐる抗争、「一景」は、移民たちが入耕可否の検査を受ける場、「二景」は、古参の日本人が、入耕したばかりの移民の掘立小屋を訪れてくる場、「三景」は、少年と監督の忠実な助手である男との口論の場、「四景」

は、耕地の火事の場、「五景」は、焼死した男の墓を詣でる場といった構成になるもので、ハワイの抱えていた問題とともに、日本人移民の惨苦を刻みこんだものとなっていた。

例えばそれは、大切な土地が二束三文で売られていくこと（序景）、妻が駆け落ちしていくこと（一景）、移民はジャガスと同様だと見られたこと（二景）、食事が極度に貧弱であること（三景）、「パケーに体を売つた方がよかつた」といった話がなされること（四景）、ジャガスを撃ち殺すピストルの音が聞こえてくる（五景）といったことが取上げられていて、金のなる木があると思ってやって来た国が、実は地獄のようなところであったというものである。

劇は、焼死した親友の墓を詣でた男が、地獄のような耕地で働くものたちを「救ふ」ために「一生懸命やらう」という言葉で幕を下ろす。

「ジャガス」は、最初ハワイに渡ったとき、世話になった先輩から「初期の移民が、日本での契約とは異り、牛馬同様の過酷の労働を強いられた委しい具体的な話を」[19] 聞いて書かれたものである。

「ジャガス」に出てくる話は、決して珍しいものではなかった。ホノルルで発刊されていた2大邦字新聞『布哇報知』および『日布時事』をめくればいくらでも出てくる。例えば「物価は二重三重に騰貴しても給金は依然として昔のまゝなので、耕地労働者は生計難に苦しみ、色々の哀話を産みつゝある」として、1919年10月21日付け『布哇報知』に掲載された「資本家の冷酷」、耕主の「冷酷無情」を批判した記事[20]、「昔の布哇は、女と云つたら百人に対する一人にも当ら無いと云ふ有様なりし事とて若し日本から女が来たと云へば、他人の女房であらふが娘であらふが将た又、渋皮の剥けた女であらふがあるまいがそんな事には少しもお構ひなしで独身者は直ちに人の女を包囲攻撃し甚だしきに至りては亭主の留守を狙つて盗み出すと云ふ騒ぎ」と書き出された1916年8月10日付き『布哇報知』の記事[21]、また「沖縄県人屋賀妖善と云ふは今より三ケ月前妻カマトを呼寄せたるに此の女元来蓮葉な性分に生れ付いたるため来布当座より博愛主義を施し宜からぬ噂を流したる事再三に止まらず然る所カマトは毒を喰へば皿までとの大それた度胸を据へ数ある姦夫の其の中一番虫の好いた新垣某と手に手を取りワイアルアより何れへともなく逃走したり」といった『日布時事』1913年3月26日に報じられた記事[22]等、同種の話は枚挙に暇が無い。

「ジャガス」で扱われている出来事は、特別なことなどではなく、初期移民の哀史として、よく知られていたといっていい。

「ジャガス」は『三田文学』に発表された後、1942年（昭和17）4月発刊された『ハワイ』に収録する際、手を入れていた。それは間違いの訂正にはじまり、注記の削除、不備な文意の補筆そして主要な登場人物の名前の変更といった点に及んでいる[23]が、それだけに留まらなかった。

次は『三田文学』に発表された「ジャガス」の最後の場面である。

新田。今迄あんなに云ふまゝに諾いて牛馬以上に働いてゐた自分が俺は可笑しく考へられるよ。長岡が死んだので始めて覚めた。耕主も吾々も同じ人間だ。何故あんなに出鱈目な酷い仕打ちを受ける訳があるか。私はきつと〳〵長岡の魂を安める為めに、ここの耕地の労働者皆を救ふ考へだ。
きよ子。ええ！ 妾も出来るだけやりますわ。
新田。一生懸命やらう…。

それが、『ハワイ』に収録された「ジャガス」では、次のようになっている。

藤田　今迄あんなに云ふまゝに諾いて、牛馬以上に働いてゐた自分が、俺は近頃可笑しくなつたよ。長岡が死んだので初めて目が覚めた。耕主も吾々も同じ人間だ。何故あんなに出鱈目な酷い仕打ちを受ける訳があるか。ここの耕主は顔だけは人間だが、それこそ地獄の鬼でもこんな酷い心は持つてゐないのだ、鬼は人間にゐると聞いたが、耕主のことだつた、いや耕主ばかりではない、アメリカ人は皆鬼だ、鬼でなくて、どうしてピストルで脅して火の中に飛び込まして殺すことが出来るか、さうだ、鬼を退治するのは日本の男だ、俺は生命を賭けてやる考へしてゐる。それで初めて長岡の魂も安まる。われわれ同胞が心を合して当れば、欲の深い鬼はきつと退治できるのだ。
きよ子　ええ！ きつと出来ますわ。
藤田　生命を賭けて出来んことはない。きつとやらう…。

藤田（初出は新田）のセリフを、宮城は『ハワイ』に収録する際、大きく書き変えていた。

『ハワイ』が刊行されたのは 1942 年 4 月である。日米の戦争が始まったのがその前年 41 年（昭和 16）の 12 月であった。そのことを知れば「ここの耕主は顔だけは人間だ、それこそ地獄の鬼」にもまさるといった言葉から「アメリカ人は皆鬼だ」と続いていく「藤田」のセリフの増補が、何ゆえであったかを理解するのに難渋するといったことはないであろう。

3. アメリカへの憤り――連作作品と「アラモアナ事件」

真珠湾への奇襲攻撃に沸いた年が明けて間もなく刊行された『ハワイ』は、その題名から、多分に真珠湾での大勝利に関する戦記だと想像されたに違いないが、『ハワイ』の中で戦争と関わるものといえば「大東亜戦争勃発の日――『都新聞』」の付記がある「爆撃された布哇」と題された短い随筆 1 編だけである。他は真珠湾爆撃以前のハワイを背景にしたもので、「ジャガス」を別にすれば、題材を求めて渡布した 2 度目の体験を踏まえて書かれた作品が採られていた[24]。

「創作」の部に収録されている「三等渡布記」「ホノルル移民局」「ホノルル」は連作と

いってもいいものである。新進作家と目されるようになった宮城が、作品の素材を求めるためにあえて三等船客として乗り込んだ体験を下敷きにしている。

「三等渡布記」は、乗船1週間前「アメリカ領事館」で「査証」の発行を依頼するところから出帆、船中での出来事そして上陸するにあたっての検疫検査までが書かれていて、それぞれの場面で思わぬ障害に出会い狼狽、反発、憤激する主人公の姿が描かれていた。

主人公の進登は、切符を買う前に、旅行事情に詳しい旅館に行って相談しようと思い訪ねる。するとそこに、かつてハワイで一緒に遊び廻った知人がいた。偶然の出会いを喜ぶと共に彼に一切を打ち明ける。彼は「帰りは三等で結構だから往きだけは二等にしなさい、でないと、大体米国の官憲が人間扱ひしないぞ、理屈もへちまもない、一二等は紳士で、三等は米国の大嫌いな労働する動物と見做してゐるのだからね」と忠告する。進登は、彼の忠告に従わず、三等でいくが、上陸にあたっての検査が、彼の忠告通りであったことがわかる。

次は、検査を前にした主人公進登の胸をよぎった思いが綴られている箇所である。

> やがて彼は、それを、日本に対する米国からの侮辱として感じた。すると、その侮辱の原因を思ふのであつた。それは、我等日本同胞が、自由に移住していい筈のわれ等東亜民族の土地、即ち、マレイ、スマトラ、ボルネオ、ジャバ、豪州などへ、イギリスやオランダが、しめ出しを喰はせて、自然、アメリカに移民しなければならなかつた。そして米国は、不毛の地を、血と汗で美田にしてやつた我々の同胞を人種的差別で虐待するのである。――祖国の力が身内に湧いた、何時かはこのハワイが、移民官がなくて来られるやうな想ひになり、そして豪州を始め南太平洋の島々が日本と同じ一色に塗られた地図を頭に描くのであつた。

「三等渡布記」は、そのように日本人の三等船客を人間扱いしない「米国の役人達」の態度に憤慨し、「豪州を始め南太平洋の島々」とともに、ハワイが、日本の領土になる日の来ることを考えるところで終わっていた。そのことは、他でもなく、日米戦の勃発が実感される状況にあったことを語っているが、それは乗り合わせた「夫人」たちとの船中での会話にも現れている。

2世たちが日本の「軍歌や唱歌」ばかりを歌っているという一「夫人」の話から、「人種の差別」に話が移り、その後に次のような会話が続いていく。

> 『へえ?、そんなに酷い差別をするのですか。ぢや万一日米戦争があると、親子がほんとに敵味方になりますな』
>
> 『いや。二世は、アメリカの国民だからアメリカの軍隊になつて戦ふが、然し**鉄砲は後へ向ける**と云ひますわ』[25] 二世の谷口夫人が答へた。
>
> 『戦争になると日本ははあ、それや強いですけん、アメリカは飛行機を威張つてゐるが、はあ、日本の飛行機もなか〳〵やるさうだ、わしは今度聞いてきたが…』

「2世」たちは、アメリカの敵日本にではなく、味方のアメリカに銃をむけるそうだ、

といった話や日本の飛行機もアメリカの飛行機に劣らず優秀だそうだ、といった話がまことしやかに語られる様子が写しとられている。日米戦が、現実味を帯びつつあったことをよく語っている場面である。

「ホノルル移民局」は、「三等渡布記」の続きで、検疫検査の後、下船し移民局の抑留所で過さざるを得なかった日々の出来事を書いていた。

三等船客は「米国領土、即ちハワイ、カリフオールニアへ移住した日本人と、その子弟の母国訪問の帰途が大部分」を占めていて、彼らは「ひたすら無事の上陸を念じ、アメリカ官憲の心証をよくしようがため、怯々として、長い航海中に人格を太平洋の海底深く投げ捨てゝ来たもの」のように見える。そして「猿紅色の顔したアメリカ人」の「屈辱に唯々諾々と甘んじ」「アメリカの独善国法に考察を廻す不逞の者」などいない。一時入国者である主人公の進登にしても「三等客であるからには三等的卑屈、屈辱に甘んじる美徳に醇化し、無事に上陸を願う心に変りはない」が、彼は上陸を許されず、移民局に送られる。

宮城は、抑留所の建物を、まさしく作家の目でもって、克明に描いていく。そして抑留された者たち――古参の「白地浴衣を着流した若者」「胴抜きのアンダーシャツにスポーツ猿股の若者」「中華民国人」「比島人」「痩せた老人」を含め新参者の進登たちとともに監視人や移民官、書記、通訳官などの動きも同様に細かく観察している。

宮城は、移民局の抑留所に閉じ込められた者たちの喜怒哀楽を描いていく中で「七重八重に堅めて東洋人を囚めるアメリカ移民局に、再び夜が来た」[26] と進登の抑留がまだ続いていることを示し、作品を次のように閉じていた。

> 何時しか進登はアメリカの移民局を考へてゐた。平素は温和な彼だが、むらむらとアメリカの独善政治、東洋人への人種的偏見に憤りを持ち出してゐた。
> ――移民局のないハワイ！ ダイヤモンドヘツドに砲台がなくなるハワイ！――。そして日本を想ひ、果てはまたハワイが蘭印や豪州と共に日本と同じ色に塗られた地図なども思ひ浮べるのであつた。

ハワイが、日本領になることを願う主人公の姿がここにも見られる。「三等渡布記」「ホノルル移民局」はともに、同じ事を「思ひ浮べる」主人公を描いて終わっている。

「アメリカの移民局」の三等船客に対する対応のひどさに発した憤りが、ハワイの占領を「思ひ浮べ」させるというのは突飛すぎるが、そのような飛躍を可能にする状況というのは確かにあった。それは、「蘭印や豪州」の占領に沸き立っていたというだけではない。渡布する日本人の多さと、ハワイに住む日系人たちの祖国日本への熱誠にひたすらなものがあったことによる。

連作作品最後の「ホノルル」は、進登が以前来た時に知り合った人たちが、移民局の抑留所から出てきた進登を迎えて、新聞社や領事館を案内したり歓迎会を開いたり、夜の街を探訪したりしたあと「寝静つて暗いカラハアヴエヌーを驀進してゐる」ところで終わるが、その終わりを「七人の日本人を乗せた車は、ギリシヤ神話のサンダルとなつ

て西の空を天翔り、彼等の魂を乗せて、愛する祖国日本へ突進してゐるのであつた」と閉じていた[27]。

それは、ハワイで生活していても、その魂は日本人であることをことさらに強調しようとしたものであったといっていいだろう。「ホノルル」が、「三等渡布記」「ホノルル移民局」の後を受けて書かれた作品でありながら、進登を主人公にしてないことにもそれは現われている。

作品の眼目は、進登が先にホノルルを訪ねた時「まだハイスクール在学中だった」上田が、日本映画「上海陸戦隊」を見たり、ラジオで「日本海々戦のあつた海軍記念日の日日比谷公会堂」で行われた講演の録音に耳を傾けたり、ラジオドラマ「海行かば」を聞いたり、「練習艦隊乗組みの従兄」を桟橋まで送っていったりするなかで、日米の比較をしながら、母国日本の「生死無我忠君殉国の精神」や「非常時国民の意気」や「日本の軍規の厳粛さ」に思い至るというもので、練習艦隊浅間、八雲をホノルルに迎えて沸き立つ日本人社会を背景にしていた。

1935 年（昭和 10）6 月 15 日付き『日布時事』は「帝国練習艦隊来る　海の宮様方三方の御機嫌いと麗はし　けふぞ迎ふる我等が海の勇士！ 旭日旗を仰ぐ同胞の感激」の見出し[28]を掲げた特別号を出し、19 日には「練習艦隊けさ抜錨　奉・歓迎の同胞一万　埠頭に描く感激の渦巻　畏し三宮殿下にはレイを懸けさせられホノルルに御名残りを惜ませ給ふ　万歳声裡に一路ヤルートへ」といった見出し[29]で 15 日から 19 日にかけて、あと 1 つの邦字新聞『布哇報知』とともに連日大々的に歓迎、送別の記事を出しその熱狂振りを伝えている。宮城は、その興奮を作品の背景にしていた。

宮城は、ホノルルの日本人社会を熱狂させた練習艦隊来航を描く一方で、ホノルル中を震撼させた事件も取扱っていた。「アラモアナ事件」がそれである。

1931 年（昭和 6）9 月 14 日付き『布哇報知』が「非倫極道の不良団　白婦人を輪姦？ 暴力沙汰で婦人を誘拐　アラモアナの藪中で　嫌疑者七名昨夜より厳重取調中」の見出しで報じた事件[30]を、その発端から犯人と思われるものたちの検挙、裁判の開始、公判での原告・被告両側証言、犯行現場検証、巡査証言、両方代言人による弁論を経て 12 月 6 日「ジユーリーの意見不一致でミスツラル（未結審）になった」[31] こと、5 人の被告は、ポンドを提供し自由になったが、原告は再審の準備に着手したこと、その後被告の 1 人の日系人が、水兵に拉致されリンチを受け気絶したが蘇生したこと、同じく被告の「ハワイ土人」1 人が斬殺されたこと、犯行に及んだ中尉以下 4 人が拘留されたが 1 時間ほどで釈放されたといったことを新聞報道を参照しながら書いている。

宮城は同事件を追っていく中で「主として白人は官憲とマツシー夫人の同情に傾き、有色人種は被告の無罪を信じた」と記し、事件をめぐって「白人」と「有色人種」が真っ二つに割れたとしている。

宮城が「アラモアナ事件」を書いた意図は明確である。それは「実話」を締めくくるにあたって「アメリカの政治がアングロサクソン以外は人間でないと考える好見本であつた」と強調しているからである。

4. 故郷の懐かしさ――ハワイ紀行と随筆

『ハワイ』に納められた「創作」及び「実話」は、アメリカ批判に主眼があったといっていい。それは「紀行」の中にも「アメリカ人は、最初のハワイ発見者はキヤプテンクツクと云つてゐる。がこれは神を畏れぬ不遜の心の現れである。白人を誇り、有色人種と蔑げすみ、そして有色人種を獣類と同じく見下した傲れる心の現れである」[32] といった箇所や「谷の景色に加ふるに川口の景色があり海浜もあり、市の眺めあり弦月湾の大展望がある。そして吾等の立つた背後の住宅の庭々の美しさもなか〳〵いゝ、しかし白人の特種部落で人種的の障壁を設けてあるといふのはやはり、アメリカ独善を感じさせた」[33] といった箇所が見られないわけではないが、「紀行」は、必ずしもアメリカを批判するために書かれていたわけではない。

「紀行」には日付がついている。「オアフ島紀行」が、七月三日から十八日、飛んで八月六日から九月七日までになっているのは、その間にハワイ島[34]、マウイ島[35]へ出かけていたことによる。「紀行」には、それぞれの島の素晴しさとともにそこに住む人々の人情の厚さを取り上げていた。

宮城がハワイに引き付けられた由縁であるが、後1つ、そこには宮城を捕えて離さないのがあった。

> 夏になると、自分にはハワイや故郷の懐かしさが強く湧き出す。南の海、南の空の色が堪らなく偲ばれる。自分がハワイへ行つたのは、二度共初夏の日だつたが、横浜を出た船が、明日はホノルルに着くといふ日あたりからは、海の色を見て、はツと故郷へ来た感じに打たれた。
>
> 亜熱帯色の鮮かな群青に変つてゐるのである。変つてゐるのは海ばかりではない、空も深く透き轍つて鮮かである。
>
> ホノルル郊外のワイキキビーチに坐つてゐると、涙が自然に湧き出た。

「随筆」の部に収録された1編「夏日南を懐ふ」に見られるものである。そこにはまたコナの海について「銀白色の海は波がなく凝然と平かなので、成る程と思はれたが、沖縄の夏の夕暮れ時の凪ぎと全く同じ海だつた」と書いているように、ハワイは故郷沖縄を遥かに偲ばせるものがあった。

宮城のアメリカへの違和も反感も、時代がしからしめたものであったが、それは、ハワイに寄せる思いが強かったからにほかならない。ハワイが「故郷へ来た感じ」を与えるものであったことによって、ハワイに寄せる思いはいよいよ強くなっていったのである。

おわりに

宮城は「紀行」の中で「私の為めにホノルル同胞有志の一般歓迎会といふのを催して貰つた。それには、二つの大新聞の学術担当のMさんやFさんなども見え、ホノルルの潮音詩社同人の歌人や、文学愛好家も大勢見え、若い女の人なども四五人交り、先輩、同郷人、旧知、未知、随分賑かで、すつかり恐縮させられた」[36] といったことや、「夜になると、Mダクター夫妻は、私の歓迎の宴を開いて下さつた。新聞社やヒロ俳句会、銀雨社等の人々に私を紹介しようとの心遣ひに依つたもので、夫人は、朝の中からコツクのXさんを始め家人を指揮され準備したらしいのである。夕方からは二階の床の間の大座敷でヒロの文学に縁故のある多くの知識人が集つた」[37] といったことを書いていた。

宮城の2度目の渡布が、創作の素材を求めての旅であったことから、文学に関心のあるものたちとの交流が行われたのは自然だが、それ以上に、宮城が「新進作家」の1人として注目されるようになっていたことが、会を盛り上げる一助になったに違いない。

ハワイの文学界は、新進作家の宮城を迎え、心からの応対をしたことがわかる。そして宮城は、そのことへの感謝を含めて、ハワイの文学状況を報告した「憶ひ出のハワイ歌壇」[38]、に続く「ハワイ短歌壇」[39]、「ハワイの日本文学」[40] 等の文章を発表していたが、『ハワイ』には、それらの文章を収録していない。

戦勝に沸くなかで、ハワイの短歌会や俳句会に関する文章など見向きもされなかったであろうが、宮城の報告は、英語圏のなかでの日本語の表現活動を伝えるものとして価値があった。さらに付け加えておけば、沖縄系移民の表現活動に関心のあるものにとっても大切なものであった。比嘉静観、嘉数南星といった名前が見られるからである。

しかし、宮城には、沖縄系移民たちが、ハワイでどのような表現活動をしていたかについて、特別関心があったように思われない。もし彼が、その点に関してもう少し眼が向いておれば、同じ作家として、ハワイで精力的に小説作品を発表していた外間勝美[41]について、何らかの形で触れたはずであるが、彼についての言及はない。それは『ハワイ』に収録した作品が、沖縄系移民を描こうとしたのではないことを端的に示すものでもあった[42]。

注

1）「文学と私　連載14」（『新沖縄文学』第22、1972年6月1日）で、宮城は横浜を5月3日にたち、「十一日目」にホノルルについたと回想しているが、記憶違いかと思われる。宮城が、ホノルルについたのは、6月4日であることが、1927年6月4日付き『布哇報知』（「黒人野球団を乗せ　サイベリア丸入港　当地上陸客は二百二名である」乗船名簿）に見えているからである。

2）「文学と私　連載14」『新沖縄文学』第22、1972年6月1日。

3）1927年6月4日付き『布哇報知』は、「サイベリア丸　帰布者氏名　全部八十二名」の小見出しで「今朝入港のサイベリア丸の当地上り船客は一等七名、二等一名、三等七十四名、合計

八十二名にて県別氏名左の如し」として乗客名簿を出していて、「一等船客」の中に宮城久輝の名が見えている。船中で知り合った「山城ホテルの若旦那」とは、やはり一等船客の中に「山城松一」とある、その人であろう。ちなみに山城松一は「公人私人」の欄に「太平洋漁業会社の同氏単独にて同上帰布」とあるが「山城ホテル」の件は記されていない。

4）　注 2 と同。

5）「文学と私　連載十八回」（『新沖縄文学』第 26、1974 年 10 月）に「足かけ十年間勤めたこの雑誌「改造」に一行でも自分の書いたものが採用される日があるだろうかと、思い通して来た。折口信夫さんに、故郷の沖縄で、小説を書くために東京へ出て行きますといったが、余りに狭い門である作家の道をはっきり知った時、そう思った。しかしどうしてもやるのだという心はわたくしの体にしみ込んでいて、いわゆる夢寝の間も忘れてはいなかった」と書いていて、沖縄にいるときから、作家になることを夢見ていたことがわかるが、その思いを決定的なものにしたのがハワイであったといえよう。「琉球で知つた折口信夫」（『短歌研究』1935 年 1 月 1 日）の中にも「ゆく〳〵は作家として立つ積りだと答へた」といったのが見える。

6）　宮城は「一九二七年、三六年の再度のわたくしの渡布旅行が、偶然だが五月であった。三六年の時も、ホノルルの街は、九年前と変ってはいなかった」と「文学と私　連載 15 回――ハワイの思い出――」に書いているが、2 度目の渡布は 36 年ではなく、35 年である。

7）　注 2 と同。

8）　注 5 と同。

9）『生活の誕生』（文生社　1946 年 10 月 25 日）「あとがき」で宮城は「「生活の誕生」は師、里見弴の叱正数回の書き直しを経て 1934 年 3 月号『三田文学』に掲載された。それより少し前に、やはり里見弴の推薦で、東京日日新聞、大阪毎日新聞の夕刊に「故郷は地球」の題で、連載創作を発表したが、自分の処女作は、「生活の誕生」である」と書いている。

10）　注 5 と同。

11）　注 5 と同。

12）　宮城は「一九三五年の三月には東京日日（現在の毎日）と大阪毎日新聞の夕刊純文学作品の連載」（「文学と私　連載 14 回」）と書いているが、作品が連載されたのは 1935 年ではなく 1934 年である。

13）　岡本恵徳「脱出と回帰――沖縄の昭和初期文学の一側面」及び「沖縄の昭和期の文学の一側面――「生活の誕生」を中心に――」（『沖縄文学の情景　現代作家・作品を読む』2000 年 2 月ニライ社）を参照。

14）　仲程昌徳「位牌と遺骨――二つの出郷作品をめぐって」（『日本東洋文化論集』第 11 号、2005 年 3 月）。

15）　宮城は「週刊朝日」に発表したと回想しているが、『新青年』（1930 年 11 月号、赤藤了勇氏のご教示による）の間違い。ハワイに取材した作品としても宮城の創作としても殆ど始めのころのものである。暴行を受けた白人女性が、犯行を黙認したにも関らず、あえて自首した現地人の行為を書いたもので、際物的で、習作の域を出るものではない。取上げるまでもないが、ハワイに取材した作品、とりわけ「アラモアナ事件」との繋がりなど、後の作品に見られる白人対ハワイ人の確執が描かれているという点で見落とせない作品だといえないわけではない。

16）　注 5 と同。

17）　注 5 と同。

18）　注 2 と同。

19）　注 2 と同。

20）「生活困難なるが為に家庭の和楽も破れ行く子供達ちを連れて帰国す――父母に別れる子供の不幸さ」の見出しがある。

21）「本婦人非常に多くなったぞ　亭主を嫌つて家出した女房住ふに家なく再び舞戻る昔の布哇であつたら独身者の横奪競争が始まるのだ　婦人の増加はすべて子供の増加なり」の見出しがある。

22）「姦夫姦婦処刑　沖縄県人の駆落騒ぎ」の見出しがある。
23）「ラナイ島」が「ニイハウ島」へ、「新田」が「藤田」へといった地名、人名の変更、「注発音をハワイ地方に取る。例へばtwenty third fivety sevenをトワンテー、タード、ファイテー、セブンと云ふ、by and byをバンバイ、anather manをナダーマン、waterをワダと云ふ如し、又、ワヒネ（妻）ヒラヒラ（恥じる）カウカウ（食事）などのカナカ語、併せてバケー（支那人）などの訛言などもそのまま使用する」といった注の削除、その他文章の増減など数多く見られる。
24）本稿では、『ハワイ』に収録された作品をテキストとして使用した。
25）『創作　ホノルル』（東京図書株式会社、1936年7月1日）所収「三等渡布記」では、ゴチック体の部分は伏字（「×××××××××」）になっている。
26）「七重八重に堅めて東洋人を囚めるアメリカ移民局に、再び夜が来た」の箇所、そして以下引用した箇所等『ハワイ』に収録された際書き加えられたもので、初出の『三田文学』（1937年1月1日）には見られない。
27）本稿で引用した「三等渡布記」「ホノルル移民局」「ホノルル」の結末の文章は、『創作ホノルル』に収録されている作品には見られない。『ハワイ』に収録する際、書き加えられた箇所である。宮城のハワイ関連作品に関しては、真珠湾以前と以後という観点から、論じられる必要があるが、それは別稿にゆずりたい。
28）同日の『布哇報知』は「宮殿下御三方お乗組みの帝国練習艦隊来る　けさ八時四十五分「浅間」「八雲」の両艦堂々と第七号桟橋に入繋　海に陸に歓迎の大絵巻」の見出しになっている。
29）『布哇報知』は「万々歳轟く裡に練習艦隊けさ出港　皇国の将士に別れを　惜しむ同胞無慮一万　一路南洋統治領へ」の見出しになっている。
30）同日の『日布時事』は「痴漢横行時代　七人組不良の□め　白婦人凌辱さる　土曜日深夜アラモアナで　被害者は地位あり教養ある婦人　日曜夜にも一婦人襲はる」の見出しで報じている。
31）1931年12月7日付け『日布時事』は「アラモアナ強姦事件　九十四時間に亘り審議せるも陪審員の意見不一致　裁判は遂にミスツライアルに入る　昨夜十時五分ステツドマン判事はジユリーの解散を命じ原告側は再審の要求を発表す」の見出しで報じた。
32）「裏オアフの記」。
33）「ヒロ滞在記二」。
34）「ハワイ島紀行」7月10日～24日。
35）「馬哇紀行」7月26日～29日。
36）「ホノルル」。
37）「ヒロ行」。
38）『短歌研究』1935年7月1日。
39）『短歌研究』1936年1月1日。
40）『制作』1935年12月。
41）外間は、『実業之布哇』に1933年「さようなら」、34年「布哇狂想曲」、35年「春の序曲」「愛情に涙する者」、宮城が渡布した三六年には一月号から「移民地哀話」を連載中であった。ハワイの沖縄出身作家として数多くの作品を発表。外間加津美、絵島洋太郎のペンネームがある。
42）「ホノルル移民局」の中で、宮城は、主人公進登が「おやツ！」と思った出来事として「日本人側の隅のベツドから、異様なメロデーの俚謡が流れて来た。ベツドに横坐りで足を垂げてゐた進登は、おやツ！ と思ふとすぐに立ち上つてゐた。それは20年近く忘れてゐた一種独特のメロデーで、彼の故郷の民謡だつたからである。進登はその唄で故郷を共にする青年だと知ると、意外を感じながらそのベツドの前に行き、いきなり郡や村を尋ねた。すると安田兄弟もやつて来て、方言丸出しにベツドの青年に話しかけた。進登は安田達が兄弟であり、そして自分と同郷なのも初めて分り、これまた意外であつた。」といった箇所が見られるが、とりわけ「沖縄系移民」に関心があったというほどではない。

参考文献

岡本恵徳責任編集（1994）『ふるさと文学館　第54巻　沖縄』ぎょうせい、東京。
岡本恵徳（2000）『沖縄文学の情景　現代作家・作品をよむ』ニライ社、沖縄。
比嘉武信編著（1990）『新聞にみるハワイの沖縄人90年戦前編』若夏社、沖縄。
比嘉武信編著（1994）『新聞にみるハワイの沖縄人90年戦後編』文進印刷株式会社、沖縄。
神谷忠孝・木村一信編（2007）『〈外地〉日本語文学論』世界思想社、京都。
崎原貢（1980）『がじまるのつどい　沖縄系ハワイ移民達の話集』ハワイ報知社、ハワイ。
神村朝堅編（1951）『おきなわ　ハワイ特集』第3巻第10号、おきなわ社、東京。